

『群衆心理』

ギュスターヴ・ル・ボン著，櫻井成夫訳(1895 原著，1993 訳著)，講談社学術文庫

目次

- I. はじめに
- II. 筆者紹介
- III. 群衆とは
- IV. 本編～群衆の性質「群衆は〇〇である」～
- V. 群衆の信念や意見を決定するもの
- VI. 終わりに
- VII. 参考文献

I. はじめに

「群衆は、歴史上常に重要な役割を演じてきたが、この役割が今日ほど顕著なことは嘗てなかった。個人の意識的な行為に取って代わった群衆の無意識的な行為が、現代の特徴の一つをなしているのである」

『群衆心理』序文より

皆さんは今までの人生を 1 人で生きて来たであろうか？ 恐らくそのような方は居ないであろう。親をはじめとした家族や、友人達の助けがあったからこそ生きて来られたに違いない。人間はおよそ 1 人では決して生きて行くことが出来ない。だからこそ誰かとグループ、つまり「群れ」を作り、その中の一構成員として生きているのである。今回の読書会は、そのような人間の群れ、つまり「群衆」に焦点を当てたものである。

人は何か行動を起こすとき、往々にして誰かと協力しようとする。しかし、そのようにして構成された群衆は、時として、その構成員 1 人ひとりでは決して成し得なかった方向へと自身を突き動かしてしまうことがある。今回の読書会では、そのような群衆の性質を取り上げることによって、聴衆の皆さんの「自律的な」行動への架け橋を提供することを目指したい。

II. 筆者紹介

ギュスターヴ・ル・ボン(Gustave Le Bon)

1841～1931。フランスの社会心理学者。医学を修めた後、心理学や人類学、物理学など学問的関心は多岐に及ぶ。群衆心理を論じ、社会心理学の道を開く。主な著書に『印度の文明』『物理の進化』『民族進化の心理法則』『フランス大革命と革命の心理』など多数ある。

櫻井成夫 (さくらい なるお)

1907 年東京生まれ。早稲田大学仏文科卒業。元早稲田大学教授。主な訳書に『孤独』(エストニエ)『若き日の夢』(ラマルチーヌ)『フローベル初期作品集』などがある。1993 年 2 月没。

Ⅲ. 群衆とは

ル・ボンによれば、「群衆」という言葉の意味は、以下の通りである。

「(群衆とは、) 任意の 個人の集合 を指していて、その国籍や職業や性別の如何を問わないし、また個人の集合する機会の如何を問わない」

そして「群衆」には、心理学上の意味において、更に重要な要素が追加されると述べられている。

「ある一定の状況において、人間の集団は、それを構成する各個人の性質とは非常に異なる新たな性質を具える。すなわち、意識的な個性が消え失せて、あらゆる個人の感情や観念が、同一の方向に向けられる」
⇒ つまり、大事なことは 個人の意思 の総和 ≠ 集団の意思 ということである。

しかし、ただ“同じ場所にいる”というだけで(例：渋谷の人混み etc...)「群衆」の性質を帯びる訳ではない。

「多数の個人が偶然に寄り合ったからといって、組織された群衆の性質を帯びるものではない。千人ばかり個人が、何らはっきりした目的もなく、たまたまある広場に集まったからといって、少しも心理的群衆を構成する訳ではない。心理的群衆の特性を具えるには、ある 刺戟¹が必要である」

また、「群衆」はあるものに支配されると述べられている。

「群衆は、ほとんど専ら 無意識 に支配されるのである。その行為は、脳の作用よりも、遙かに脊髄の作用を受ける。脳によって導かれるのではないから、個人は、刺戟の働くのに任せて行動する。群衆は一旦受けた衝動の奴隷となる。個人は、理性によって、その刺戟に従うことの不都合を悟れば、それに従わないが、群衆はこの能力を欠いている」

Ⅳ. 本編～群衆の性質「群衆は〇〇である」～

① 群衆は 感染 する

ある事柄に元々は興味のなかった人々でも、周りの人々に影響されて、その事柄に手を出してしまうという性質が群衆には具わっている。

例) アラブの春、フランス革命、米騒動、流行

「群衆の思想・感情・信念などは、細菌のそれにも等しい激烈な 感染力 を具えている。人々の心を同じ方向に向けて、それに群衆特有の性質を帯びさせるある種の事件の影響を受ける時に、感染は、遠く離れている間にも行われることがある」

また、感染と似た概念に 模倣 というものがある。

「模倣 は、人間にとっては一種の要求となっている。流行の影響力が生まれるのも、この要求からである。群衆を導くのは、模範 によるものであって、議論によるものではない。いずれの時代にも、少数の個人が行動を起こすと、無意識 な多数者が模倣する」

¹ ル・ボンによれば、「例えば国家の大事件のような、ある強烈な感動(＝刺戟)を受けると、心理的群衆の性質を具えることがある」とされている。

② 群衆は 過激 に走りやすい

個人では絶対に「暴力」などの過激な行動には走らない人々でも、それが群衆となってしまうと、いとも簡単にそのような行動を起こしてしまうのである。「赤信号 皆んなで渡れば 怖くない」である。

例) 1992年のロサンゼルス暴動、関東大震災時の朝鮮人虐殺

「群衆中の個人にとっては、およそ不可能という観念は消滅する。単独の個人ならば、自分ひとりで宮殿に放火したり、店舗を荒らしたりすることが出来ないのをよく知っている。大体、そういう気さえ、殆ど頭に浮かんでこないのだ。ところが、その人が群衆の一員になると、多数の与える力により、殺人なり略奪なりの 暗示 が少しでも与えられると、たちまちそれに従う」

「恐らく群衆は、しばしば犯罪行為を示すことがある。しかし、それは何故であるか？ それは、凶暴な 破壊本能 が、我々各自の奥底に眠っている原始時代の遺物であるからに過ぎない。単独の個人にとっては、この本能を満足させるのは危険かもしれない。ところが、その個人が、責任のない、従って確実に罰を免れることの出来る群衆の中に吸収されると、その本能のままに従う自由が完全に与えられるのである」

③ 群衆は 衝動的 である

群衆は時として、たとえ逆の立場であろうとも、ふと心を突き動かされて行動してしまうことがある。ある時流行したものが、いつの間にか新たな流行に取って代わられることもこれに当てはまる。

例) ルーマニア・チャウシェスク政権の崩壊、オイルショック時のトイレトーパー買い占め

「群衆に暗示を与え得る判裁は、多種多様であり、しかも、群衆は常にそれに従うのであるから、その気分は、極度に 動揺 しやすいのである。群衆は、一瞬の内に残忍極まる凶暴さから、全く申し分のない英雄的行為や寛大さに走る。群衆は容易に死刑執行人となるが、またそれにも劣らず容易に殉難者ともなるのである」

「群衆は、その刹那の判裁に影響されて、全く相反する感情の段階を次々に辿ることが出来る。それは、暴風に吹き上げられて、あちらこちらに散乱し、やがて舞い落ちる木の葉にも似ている。このような群衆の 動揺 しやすい性質が、群衆を甚だ統御しにくいものにする。物事を熱狂的に望む群衆は、それを長期間に渡って望むのではない。群衆は、思考力を持たないのと同様に、持続的な意思をも持ちえないのである」

更にル・ボンは、報道の普及が「群衆の衝動性」を一層推し進めていると述べている。

「最近における新聞雑誌の普及が、相反する意見を絶えず人の眼に触れさせる。各々の意見から生ずる 暗示 が、反対の 暗示 のために、まもなく打ち破られる。そこで、どんな意見も流布するには至らず、しばしの寿命を保つに過ぎない。それらの意見は、一般的になる程十分に普及することが出来ない内に、死滅してしまう」

④ 群衆は 暗示 に弱い

群衆中の個人は、最初はそうは思っておらずとも、次第にその集団の考えや行動に染まっていく。

例) 宗教団体、広告 などのキャッチコピー

「個人はその意識的個性を失うと、それを失わせた実験者のあらゆる 暗示 に従って、その性格や習慣に全く反する行為をも行うような状態に置かれることがある。活動している群衆の最中にしばらく没入している個人は、やがて特殊な状態に、あたかも催眠術師の掌中にある秘術者の幻惑状態に非常に似た状態に陥る。その時の感情も思考も、催眠術師の決定する方向へ向けられるのである」

「それゆえ、意識的個性の消滅、無意識的個性の優勢、暗示と感染とによる感情や観念の 同一方向 への転換、暗示された観念を直ちに行為に移そうとする傾向、これらが、群衆中の個人の主要な特性である。群衆中の個人は、最早彼自身ではなく、自分の意思をもって自分を導く力のなくなった一箇の自動人形となる」

⑤ 群衆は時に 高い徳性 を示す²

「群衆」という言葉が使われる際は、何かとマイナスのイメージが付き纏ってしまうが、その一方で群衆は時に高い道徳性を示すことがある。

例) ガンジー、香港の民主化運動

「群衆は、殺人・放火をはじめ、あらゆる種類の犯罪を演じかねないが、また、単独の個人が為し得るよりも遙かに高度の犠牲的な無私無欲な行為をも行い得るのである。それゆえ、低級な本能にしばしば身を任せ群衆は、時には高尚な 道徳行為 の模範を示すこともある。無私無欲・諦め・架空のまたは現実的な理想への絶対的な献身などが、道徳上の美点であるならば、群衆は、最も聡明な哲人でもめったに到達出来なかった程度に、これらの美徳を往々所有するものであると言える」

「言語道断な悪党どもでも、単に集合して群衆になったという事実だけで、往々極めて厳格な道徳原則を身につけることがある。1848年の革命³中、チュイルリー宮に侵入した喚き騒ぐ選民どもの群衆も、自分等の眼を奪う品物の只一つでも優に行く日分かのパン代になったのに、何一つそれを横領しなかった」

² ル・ボンによると、群衆のこのような性質は、「もちろん一定不変の法則とは言えないが、しばしば見られることである」と述べられている。

³ 1848年にヨーロッパ各地で起こった革命で、ウィーン体制の崩壊に突き進んだ。

⑥ 国民 も群衆化する

群衆には一部の人々だけがなるのではなく、一国民全体が群衆化してしまうこともある。

例) ナチス時代のドイツ国民

これに関しては、最初に述べた群衆の 感染 メカニズムの延長線上と考えていただきたい。例えば、強力な指導者の下その国民全体が群衆と化し、群衆の性質を具えてしまうことがある。

⑦ 群衆は 反復・断言 に弱い

群衆は、ある事柄を何度も繰り返されたり、断定されたりする表現に弱いのである。

例) ヒトラーの演説

「およそ推論や論証を免れた無条件的な 断言こそ、群衆の精神にある思想を沁み込ませる確実な手段となる。断言は、証拠や論証を伴わない、間接なものであればある程、益々威力を持つ。あらゆる時代の宗教書にせよ法典にせよ、常に単純な 断言の方法を用いたのである」

「しかしながら、この断言は、絶えず、しかも出来るだけ同じ言葉で繰り返されなければ、実際の影響力を持たないのである。真実の修辞形式はただ一つ、反復ということがあるのみ、とナポレオンが言った。断言された事柄は、反復によって、によって人々の頭の中に固定して、遂にはあたかも論証済みの心理のように承認されるのである」

⑧ 群衆は 同一化 する

1人ひとりの人間では、各々は種々様々なベクトルを向いて行動するが、彼らが群衆を組織してしまうと、各々の個性は失われ同一の方向へと向かって行ってしまうのである。

例) 同調の心理、KY (空気を読む・読めない)、役割期待

(再掲)「ある一定の状況において、人間の集団は、それを構成する各個人の性質とは非常に異なる新たな性質を具える。すなわち、意識的な個性が消え失せて、あらゆる個人の感情や観念が、同一の方向に向けられる」

・役割期待のお話⁴。

「自己も他者も相手の出方についての 期待 を持っている。同じ価値基準が共有されていれば、役割期待は規範的なものとなり、こちらが相手の役割期待に沿うような選択をすれば (同調)、相手もこちら欲求充足にとって有利な反応をするだろうし、こちらが相手の役割期待に背く選択をすれば (逸脱)、相手もこちらの欲求充足にとって不利な反応をするだろう」

⑨ 群衆は 服従 する

例) アイヒマン実験 (ミルグラム 実験)、ドイツ政権下のナチス国民

「動物の群れにせよ、人間の群れにせよ、ある数の生物が集合させられるや否や、それらは、本能的に、首領、すなわち 指導者 の権力に 服従 する。人間の組織する群衆の場合にあっては、指導者は重要な役割を演ずる。指導者の意思が中軸となって、その周囲に、数々の意見が作られ、統一されるのである。群衆は、統率者無しには済まされぬ輩の集まりである」

「もし、何かの事故のため、指導者 が居なくなると、直ちにその代わりが立たなければ、群衆は、団結力も抵抗力もない烏合の衆に立ち戻ってしまうのである。パリで乗合馬車の雇人達が起こしたストライキでは、それを牛耳っていた2人の指導者を逮捕しただけで、すぐさまストライキを中止させることが出来た。群衆の精神を常に支配しているのは、自由への欲求ではなくて、屈従への欲求である。服従 に対する渴望が、群衆を、その支配者と名乗る者へ本能的に屈服させたのである」

V. 群衆の信念や意見を決定するもの

・間接的なもの⁵ — 群衆を突き動かす背景にあるもの

① 種族性

「もちろん、群衆は、興奮しやすく衝動的であるには違いないが、それには非常な程度の差がある。例えばラテン系の群衆とアングロ・サクソン系の群衆との相違は著しい」「群衆というものは、どこにおいても 女性的 なものである。しかしあらゆる群衆の内でも最も女性的なのは、ラテン系の群衆である」

② 伝統

「伝統は、過去の思想・欲求・感情を表すものである。それは、種族性の総合であり、絶大な力をもって我々の上のしかかっている」「民族を真に導くものは、伝統である。そして、私が幾度も繰り返して述べてきた通り、民族が容易に変化させるのは、伝統の外形のみである。伝統がなければ、つまり、国民精神が無ければ、どんな文明もあり得ないのである」

⁴ 長谷川公一ら(2007)p.61 より

⁵ ル・ボンによれば、これにより「新たな思想が不意に発生するかのように見える地盤を準備するのである」という。

③ 時

「時は、あらゆる信念を發達させたり、死滅させたりする。信念が、勢力を獲得するのは、時のおかげであり、勢力を失うのもまた、時のためである」「時は、群衆の意見や信念を準備し、つまり、それらが發生する地盤を用意する。ある時代には實現出来る思想が、他の時代には最早實現出来ないということになる」

④ 教育と訓練

「群衆の心理に今日芽生えて、明日開花する思想や信念を理解するには、どういう風にその地盤が用意されたかを知らねばならない。一国の青年に授けられる教育を見れば、その国の運命を幾分でも予想することが出来る」

・直接的なもの⁶ — 何が群衆を突き動かすのか

⑤ 心象、言葉および標語

これは上で説明した群衆の性質の内の、暗示に特に深くかかわるものである。

「極めて意味の曖昧な言葉が、往々極めて大きな影響力を持つことがある。例えば、民主主義・社会主義・平等・自由等々のような言葉が、これである。それらの言葉は、甚だ漠然としているから、それを明確にするには、大部の書物をもってしても尚足りない程である。それにもかかわらず、真に魔術的な力が、その簡潔な音綴に伴っていて、あらゆる問題の解決の鍵が、そこに含まれているかのようである」

⑥ 幻想

「文明の黎明以来、諸民族は、常に幻想の影響を受けてきた。幻想の創始者たちのためにこそ、最も多くの寺院や彫像が築かれたのである」「群衆は、自分等の気に入らぬ明白な事実の前では、身をかかわして、むしろ誤謬でも魅力があるならば、それを神のように崇めようとする。群衆に幻想を与える術を心得ている者は、容易に群衆の支配者となり、群衆の幻想を打破しようとするものは、常に群衆の生贖となる」

VI. 終わりに

ル・ボンは『群衆心理』の一説で次のような言葉を残している。

「群衆の心を動かす術を心得ている弁士は、その感情に訴えるのであって、決して理性には訴えはしないのである。合理的な論理の法則は、群衆には何の作用をも及ぼさない。群衆を説得するのに必要なのは、まず、群衆を活気づけている感情の何であるかを理解して、自分もその感情を共にしている風を装い、ついで、幼稚な連想によって、暗示にとんだある種の創造を掻き立て、その感情に変更を加えようとする試みること、必要に応じては後戻りもし、特に、新たに生まれる感情を絶えず見抜くことである」

⁶ ル・ボンによれば、これは、「このような長期にわたる作用（注：間接的なもの）の上に積み重ねられて、群衆の内に活発な信念を引き起こさせ」るものであるという。

群衆の時代に生きる我々は、常に暗示の魔力と戦い続けなくてはならない。「偉い人が言ってるからそうなのかもしれない」「みんながそう言ってるんだからそうだろう」と安易に思っていないであろうか？ もしもそのような暗示が自らの目の前に現れたのなら、今一度、「本当そうなのか？」そして「何故そうなのか？」を考えてほしい。

我々は雄弁部員である。ある社会現象に対し、自らの考えを持ち、それを発信していくことこそ我々が為すべきことである。考えることを放棄した時、すなわち**群衆に成り下がった時**、彼を雄弁部員たらしめる理由はなくなる。

雄弁部員よ、考えて考えて考え抜け！

そして自分なりの答えを見つけ出さない。

決して周りの意見に流されてはいけませんよ。

VII. 参考文献

ギュスターヴ・ル・ボン著，櫻井成夫訳(1895 原著，1993 訳著)『群衆心理』講談社学術文庫

長谷川公一ら著(2007)『社会学 New Liberal Arts Selection』有斐閣

水島宏明「“ヒトラー時代の教訓”を伝えた『サンデーモーニング』」(最終アクセス 2015 年 7 月 14 日)

(<http://bylines.news.yahoo.co.jp/mizushimahiroyuki/20150104-00042010/>)